# ＞誘拐者

悠＜悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＞誘拐者

【Ｎコード】
Ｎ０８４７Ｄ

【作者名】
悠＜悠

【あらすじ】
誘拐された少女は驚いた・これが本当に自分を誘拐した人間なのだろうか・？誘拐者の男の動作・過去に・あまりものごとに動じない少女は男に興味を引かれていく・・・

誘拐されてから・数日たった・

今日も相変わらず男は隣の部屋にこもったまま・
時々私の顔をのぞき・すぐにまた戻ってしまう・
これがもうなん日続いたことだろうか・
はぁ・とため息交じりに何もない部屋を見渡すと・また男の視線を
感じた・

この男は変わっている・

それは私を誘拐した時点でわかってたけど・
別の意味としても・とても変わっている・

男は・私を誘拐してきたというのに・

暴力も・拘束も・
そういうことは一切
何もせず・ただ男のマンションの一室に置かれているという状況だ・

おかげでニュースで見る誘拐被害者のように手を縛ったとかの後は
残らない・
言い方はとてもへんだけど・誘拐としてはかなり快適なんじゃない
だろうか・

ご飯は男が作ったものを食べる・

何か魚や・野菜などを焼く音がしたら・もうそろそろという合図・

数分たつと男は木でできたお盆を持って
そそくさと私のいる部屋に入ってきては・
すぐに帰って行く・

食べ終わると・私は小さな声で
「終わりました・」っとつぶやく・

すると彼はまたここに来てお盆を持つと・すぐに出て行ってしまう・

ためしにこの間・
私は食べ終わった食器やらをお盆に乗せいつものように
「終わりました・」とつぶやいた・

すると男がまた入ってきて・お盆を持つと・

また隣の部屋へ帰っていく・
私はつぶやいた・

「・・・おいしかったです・」

彼は一瞬止まり・何か考え事をした後・同じように小さい声で

「・ありがとう・」

とつぶやいた・

以外と・いい人なのかも知れない・

もしかしたら・私は逃げられるかもしれない・
私がそう思い始めたのはこのころのこと・

男はそれから・ちょくちょく私のいる部屋にきた・
口数はほとんどないけれど・男は・ふっと・ごく自然にたたずんで

いた・

男は・本を読むのが好きみたいだ・

気がつくと・男はよく単行本や分厚い本を読んでいた・
よくよくかんがえると・男は・あまり外出しない・食べ物や・本を
買ってくるぐらいじゃないだろうか・
仕事はなさそうだから・きっと資産家なのだろう・

その日男は自分で食卓用の机と椅子を運んできて・
そこに腰掛けて本をずっと読んでいた・

最近・私は男の行動をじっと見ていた・

そろそろ・

男が・眠りにつくころだ・

男の・ページをめくるスピードがだんだん遅くなって・
そして・・・

とまった・

今だ！！

私は男を起こさないようにそっと今までいた部屋を出た・

つれてこられたときにちらりとみたから・大丈夫・覚えてる・

私は物音を立てないように部屋を進んだ・

とてもかたずいている・

見た目どうり・しっかりとしているのだろうな・と思った・

・

あった・

あった・

ドアが・

私はドアのぶに手を伸ばした・

あと少し・

あと・もう少しで・

出れ・・・る・・・

そのとき・もともと長かった私の髪を思い切り引っ張られる・

ドタンッっと私は後ろに倒れた・

背中から倒れたから・振動が体中に響き・一瞬息ができなくなった・

げほげほとむせて・つぶっていた目を恐る恐る開けると

男が立っていた・

ただたっているだけじゃない・

私を見ながら・泣いていたのだ・

私が・なにかとても悪いことをしたかのような・
悲しい顔をしていた・

男は小さく「ごめん」っとつぶやいた・

彼はそれ以来・私に暴力は振るわなかった・

彼は私に・自分のことを話してくれた・

彼は・悲しい男だった・

妻もいなければ親もいない・ただぽつんと
借りたマンションの一室に暮らしていた・

やっと・めぐり合えた大切な人が・昔彼にはいたけど・
・その人も・病気でなくなったと言う・

彼は絶望した・

それから数年たった今でも・

彼には生きる意味が探せなかった・

彼には世界が灰色に見えていたんだ・

だから・消えることにしたんだと・彼は私にいった・

私を誘拐したのは・

死んだ時・一人身の自分の死体が腐ったりしたら・

そう考えたらしい・

私は彼の話を黙って聞いたいた・

それから・私は彼とよく話すようになった・

意味のない話をしていても・彼は笑ってくれた・

そして・この人の顔をしっかり見たのは初めてだとも思った・

それから数日たったある日・

彼は突然言った・

「明日・死ぬことにしたよ」

私は表情を変えずに・

「そう・」っと短く答えた・

彼はいつものように悲しそうに笑って見せた・

次の日私はシャワーの音で目が覚めた・

あの日以来踏み入れていなかった

隣の部屋に足を入れる・

相変わらず綺麗な部屋だ・

シャワー音のするお風呂場に入ると
お風呂のモザイクのようなドア越しに赤を見た・
かちゃりと音を立て入ったお風呂場の中には・

彼がいた・

片腕をお風呂の中に突っ込み・

衣服は着ているけどもシャワーでぬれていた・

もう片方の手には剃刀が握られている・

血はついていない・きっとシャワーで流されたんだろう・

私はなぜか・とても落ち着いていた・

改めて私は彼の顔を見た・

・・・まだ生きているようだ・

私はお風呂場をでると・

部屋にあった電話をとった・

私は今日・誘拐者から解放された・

私には・誘拐される前にはなかった感情が芽生えていた・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0847d/

＞誘拐者

2010年10月28日08時29分発行